

## 子供と大人の狭間で

はじめまして。京都府立医科大学医学科4年生の小田智水と申します。(2021年4月には5年生になります。)大学進学を機に香川から京都に移住し、1人暮らしを初めてはや4年が経過するところとなりました。先の4年を振り返ると、日々の暮らしから大学での学びに至るまで、自分という人間の在り方を意識する日々だったように思います。これを読む皆さまが、とある大学生の4年間のプチ奮闘を垣間みて少しでも楽しんで頂ければ嬉しく思います。

私の大学生活が始まった当初の思い出深い出来事はカレー事件です。1人暮らし入門者として定番のカレーを自炊したのですが、実家では家族5人で1日もあれば空になった鍋が、半量を3日かけても食べきれず、おまけに腐らせてしまう始末。初めて知る腐ったカレーの匂いとともに、家族の暖かさを身に沁みて感じました。その後も、衣のない唐揚げや酸っぱい味噌汁などそれなりの失敗を経て、今では週末に作り置いたおかずをお弁当箱に詰めて大学に持って行くまでに成長しています。1人で送る暮らしは自由にできる気楽さがある反面、自分で自分を守る厳しさが付きものです。毎週土曜日に家族で食べに行ったうどんが美味しかった思い出を大切にしたいと、今強く思います。

大学2年生の解剖学の授業では実際に献体頂いた御身体を解剖させて頂く実習がありました。実習開始時と終了時に黙祷を捧げ、長ければ6時間にも及ぶ時間、ホルマリンの匂いの中、解剖を行いました。私たちに託された思いに触れ、学ばせて頂くことに深い感謝を抱くとともに、その思いに応えるべく勉強に励みたいと思った経験でした。今も臨床実習を通して、実際の患者さまに診察をさせて頂くことがありますが、今の私では聴診器で肺の呼吸音の正常と異常を聞き分けることすら困難です。そんな毎日の中で、机上の知識のみが勉強ではないこと、自分たちの勉強が1人では完結し得ないことを痛感しています。知ろうとする姿勢と人の思いに寄り添う優しさを持ち続け、「考える」ことを辞めない人間でありたいと、コロナ禍にあって医療の必要性をみる今の時代に医師になる決意を新たにしています。